

# 「展覧会の記録 ニキータ・アレクセーエフ 〈岸辺の夜〉展」

鴻 野 わか菜

この小文は、2017年6月8日-6月28日に千葉大学附属図書館本館で開催された「千葉大学文学部主催 ニキータ・アレクセーエフ〈岸辺の夜〉展」の記録である。

千葉大学附属図書館では、これまでも、「千葉大学附属図書館企画展示 図書資料に見るトルコの文化と歴史」(2008年5月)、「文学部日本・ユーラシア文化コースユーラシア言語文化専修主催 ユーラシア民族文化写真展～寒冷環境の克服と利用～」(2017年2-3月)、「写真展「ユーラシアのクロスロード(十字路)」(2008年1-2月)、「ユーラシア諸民族の現在」(2007年1-2月)、「20世紀初頭のアイヌ世界」(2005年1月)など、文学部教員による興味深い展覧会が開催されてきた。

「ニキータ・アレクセーエフ〈岸辺の夜〉展」は、それらの展覧会に連なる催しであると同時に、文学部の学生が、文学部で習得してきた外国語、日本や諸外国の文学・文化・歴史・文化接触についての知識、留学の成果などを活かして、著名な海外作家の日本初の個展を企画し、展覧会の準備や運営、図録の発行(資料翻訳、解説文の執筆)、オープニングやセミナーの司会、会場での展覧会解説、作家への取材等を行うというアクティブラーニングの試みである。

## 1. ニキータ・アレクセーエフ略歴と展覧会開催の経緯

ニキータ・アレクセーエフは、ロシア現代美術を代表するアーティストの一人である。スターリン逝去の年である1953年にモスクワで生まれ、芸術家と交流の深かった母親の影響で、非公認芸術家ドミートリー・クラスノベツェフ、オスカル・ラビン、アナトーリー・ズヴェーレフ、ミハイル・ロ

ギンスキーらを早くから知り、1964年から76年にかけて、スリコフ記念美術大学附属中学校、1905年記念美術学校、印刷芸術大学で学んだ。1969年に非公認詩人・芸術家のアンドレイ・モナスティルスキー、ニコライ・パニトコフらと知り合い、美術、ジョン・ケイジなどの現代音楽、現代詩、東洋文化への関心を共有し、アンダーグラウンドの芸術家グループを形成した。

1982年から84年にかけてモスクワ市南部の自宅のワンルーム・マンションを舞台に、〈APTART〉(〈Apartment〉と〈Art〉から成る造語)と名付けた一連の展覧会を開催し、多数の非公認芸術家と共同プロジェクトを展開した。

1987年から1993年のフランス滞在を経て、ロシアに帰国した後は、新聞の文化欄担当記者として海外を旅したが、やがて創作に専念するために新聞社を辞職し、現在は、モスクワ市北部のアトリエで制作する日々と、ギリシャ、モンテネグロなどのレジデンス先で制作する日々を交互に送っている<sup>1)</sup>。

ソ連では、自由に海外に渡航できなかった市民にとって、海外文学や文化は苛酷な日常に耐えるための心の拠り所となり、海外文化は「精神的亡命」、「内的亡命」の手段となった。東洋の文化も1960—70年代にかけて一大ブームとなり、少なからぬ数の詩人、アーティストが、日本や中国の文学、文化に傾倒した。

ニキータ・アレクセエフも、当時、モスクワ川のほとりの海外文学図書館に通って日本の古典や思想書を耽読し、ニコライ・コンラッドの『東洋と西洋』、エヴゲーニヤ・ザヴァツカヤの『西洋における東洋』を読み、黒澤映画に没頭し、東洋に思いを馳せる日々を送った。そしてある日、『源氏物語』を通じて、「遠くからは見えるのに、近くに行くと消えてしまう」箒木の伝説を知る。それ以来、箒木は、「手に入らないもの」の象徴としてアレクセエフを魅了し続け、彼の創作の中心的なモチーフとして、画布上に繰り返し登場することになった。箒木は、千葉大学の展示のためにアレクセエフが制作した〈岸辺の夜〉の重要な主題でもある。

かねてから交流のあったアレクセエフから、「知を愛する人々が集う日本の大学で個展を開きたい」という連絡があったのは、2016年6月のことだった。木々に囲まれた千葉大学附属図書館の写真を送ると、作家はひと目で気に入って、無償で、千葉大学の空間をイメージした新作を作り、来日して

展示やレクチャーを行ってくれることになった。これは、長年に渡って日本文化を愛した作家からの、日本の若者達への贈り物だったのだと思う。

折しも、アレクセーエフは、長野県大町市で2017年6月に開催される北アルプス国際芸術祭への参加が決まったところで、芸術祭の開催時期に合わせて千葉大学でも個展を開くことになった。

健康上の理由から長時間のフライトを避けてきたアレクセーエフが、「憧れ」の日本で作品を展示するために、「たとえ死期を早めてもかまわない」という覚悟で初めて訪日したのは、2016年12月のことである。長野県大町市での下見の後、2週間に渡って長野、京都、奈良、東京を旅し、冬の旅の最後に千葉大学を訪れた。

アレクセーエフは千葉大学のキャンパスを歩き、「4、5階建ての低い建物が並び、ここかしこに木立がある構内は、とても居心地がよく人間的な感じがする」と喜び、文学部でセミナーを行い、学生達と共に展覧会を作りあげるにはどうすればよいかを学生と熱心に話し合った。

2017年6月、アレクセーエフは再び来日し、北アルプス国際芸術祭が無事開幕した後に、千葉大学で〈岸辺の夜〉展を開催し、文学部の学生にレクチャーを行い、オープニングで学生や来訪者と交流し、数日の後、別れを惜しみながらモスクワに旅立っていった。

## 2. 展覧会準備と運営：学生の活動、海外文化機関との連携

### 2-1 学生の活動

本展では、展覧会に合わせて発行した冊子に掲載するアレクセーエフのテキストの翻訳、ロシア文化紹介のテキスト執筆、リーフレットのデザイン、作家取材、展示のための道具の作成などを、「スラヴ文化論演習」の約30名の受講生が担当し、学生が主体となって展覧会を企画した。

また、学生は分担して会場スタッフとなり、来訪者の求めに応じて、口頭で展覧会を解説し、案内役を務めた。その解説文も、学生グループが共同で考えて事前に用意したものだったが、会場で解説することになった学生達は、解説文をそのまま読み上げるのではなく、授業やアレクセーエフのレク

チャーで学んだことをもとに、自分の言葉で展覧会について説明していた。その様子からは、展覧会の内容を深く理解し、自分達の催しとして認識していることが感じられた。

アレクセーエフのレクチャーも、学生が主体となって開催された。レクチャーは、約10名の学生が、アレクセーエフにインタビューをする形式で行われた。「スラヴ文化論演習」の約30名の受講生のうち、ロシア語を学んだ経験のある学生は10名程度に過ぎなかったが、そのうちの半数以上が協定校でロシア語を学んだ経験があり、彼らが中心となってロシア語で質問を作文し、協定校のロシア人文大学から人文社会科学研究科に留学しているエカチェリーナ・クフシーノワ氏の最終チェックを経て、準備を整えた。質問の内容、構成、学生のロシア語の発音は、期待した以上に素晴らしいもので、今まで長年に渡って学生を主体とする催しを行ってこなかったことを反省した。

## 2-2 海外文化機関との連携

アレクセーエフの展覧会の開催にあたり、アレクセーエフが所属しているモスクワのギャラリー・イラギから、ギャラリーのオーナーであるエカチェリーナ・イラギ氏とエレオノラ・センリス氏が来日し、作品のロシアからの運搬、図書館での展示を手伝って下さった。千葉大学文学部主催、ギャラリー・イラギ共催として名前を入れることで、大学側が渡航費等を負担することもなく、ロシアでの広報においても協力を得ることができた。文学部の学生にとっても、海外の著名なギャラリーのオーナー、キュレーターと接することは、大きな刺激となった。

## 3. 〈岸辺の夜〉展の意義・反響

〈岸辺の夜〉展の作品の紹介や文化的意義については、すでに発行した小冊子に譲り、本稿では末尾にアレクセーエフによる解説文の翻訳を掲載するにとどめるが、ロシア現代美術を代表する作家であるアレクセーエフが、図書館、世界文学・文化、日本文学・文化をテーマにした大作を新たに制作し

たことは、美術史において意味があるだけでなく、千葉大学で展示されたことによって学生は誇りを感じたようである。事後に行った学生へのアンケートでも、著名な作家の新作の展覧会を運営したことを誇らしく思い、文学や外国語を学ぶことの意味を再認識したという記述が目立った。

本展の開催中に、文学部公開レクチャーとして連続講演会を企画した。中でも、アレクセーエフと共に北アルプス国際芸術祭に参加した現代アーティストの五十嵐靖晃氏をお招きして行った公開レクチャー「協働で生まれる景色—南極から瀬戸内まで、所作のコミュニケーション—」は、外部からも多数の来訪者があり、大きな反響があった。文学部の学生からも、「アーティストの講演を聴いたのは初めてで、その創造的な考え方、世界観に感銘を受けた」、「今までのロシア関係の公開レクチャーで一番興味深かった」という意見が多数あり、海外の研究者のみならず、作家、創作者のレクチャーをもっと積極的に企画するべきだったと反省した。

〈岸辺の夜〉展には、期間中、大学内外から約500名の来訪者があり、北海道大学、富山大学等から専門家が来訪した他、近隣や東京から美術の愛好者の方が足を運んで下さった。また、大学の中でも、職員の方々や学生、構内で活動されているNPO法人千葉市地域活動支援センター「けやきと仲間」の方々など、様々な方が展覧会をご高覧下さり、大学の中で展覧会を開くことで、文学部の学生と他の大学関係者、市民や専門家の間に交流が生まれていく様子が見受けられた。大学院への進学を希望する学生達が、来訪した他機関の専門家から学術的な助言を受けたり、学部を超えて学生が交流する場としても、展覧会場が機能していた。

#### 4. 課題と展望

前項では意義や反響について述べたが、展覧会開催において多くの課題も残った。4月に授業がスタートし、6月上旬に展覧会を開催したため、時間的制約があり、展覧会場でのキャプションなどを入念に準備することができなかった。また、参加学生の主体性や優れた実行力を目の当たりにした後となつては、連続公開レクチャーの企画や運営なども学生に任せ、多様な経

験の場を設けるべきだったと感じている。

また、アレクセーエフの作品は、解説に工夫をすれば幼児や子供も楽しめる性格を持つ作品であったため、千葉大学やよい保育園、附属幼稚園、小学校、中学校や近隣の小学校と連携して、幼児や生徒に鑑賞してもらうためのプログラムを組むべきだったと思う。

千葉大学附属図書館のスペースを授業で有効利用し、文学部の学生の学びや活動を展覧会として結実させるという試みは、今後も様々な形で継続できるのではないか。

現代美術のオリジナル作品を展示することは、本来、作品の輸送や保険、作家滞在費等の経費がかかるもので、本展においては様々な工夫でそれらのコストを最小限に抑えたが、限られた予算でも、以下のような取り組みが継続的に可能だと思われる。

### 例1 〈翻訳の展示〉

授業で海外の詩や小説を学び、学生が日本語に翻訳し、詩の翻訳、詩人についての解説、解釈等をパネルにし、原書と共に展示する。図書館の資料を活かした展示が可能である。テキストと書物のみを展示する禁欲的な展覧会も魅力的であるが、作品や作家にまつわる写真（作家肖像、都市風景）、あるいは作品をイメージして学生が撮影、制作した写真や絵画を展示することも考えられる。

### 例2 〈留学した学生を中心とする写真展〉

「国際インターンシップ」「国際フィールドワーク」（文学部）、「海外語学研修」（普遍教育）、「国際インターンシップ」（人文公共学府）、海外派遣留学等の制度で短期・長期留学した千葉大学学生と、留学はしていないがその国の文化に関心を持つ学生、協定制度で千葉大学に留学している外国人学生らが協力し、彼らが撮影した特定の国（たとえばロシア）の写真を解説文と共に展示することで、文化を幅広く紹介できると共に、留学推進にも繋がるのではないか。

本展では、担当教員である私の力不足のため、実現することができなかつ

「展覧会の記録 ニキータ・アレクセーエフ〈岸辺の夜〉展」

た催しや工夫が多々あったが、大学附属図書館における展示は、文学部の教育において様々な可能性を持っている。

\* \* \*

〈ニキータ・アレクセーエフ 岸辺の夜〉展は、多くの方々のご協力のもとに実現しました。作家Nikita Alexeev氏、Galerie IraguiのEkaterina Iragui氏、Eleonore Senlis氏、Daria Kolotovchenkova氏、千葉大学男女共同参画推進部門、千葉大学日本センター（ロシア人文大学）の石川健太郎先生、千葉大学附属図書館の米田奈穂氏、池尻亮子氏、共に学生を指導して下さった鳥山祐介先生、大塚萌氏、アレクセーエフのセミナーや本展を千葉大学文学部主催とすることを快諾し、学部長裁量経費を交付し、様々な面から本展を支援して下さった米村千代先生、ロシアとの交流を長年に渡って支援し本展の基盤を作ってく下さった山田賢先生、西村靖敬先生、文学部の先生方に厚くお礼申し上げます。

資料① ニキータ・アレクセーエフ「岸辺の夜」コンセプト

「岸辺の夜」

ニキータ・アレクセーエフ

これは千葉大学附属図書館での展覧会のために特別に制作された作品で、5つの要素から構成されている。70×3,200cmの巻物、21×960cmの巻物、大きさ30×672cmの「アコーディオン」のような作品、高さ30cmの12双の「屏風」、高さ21cmの12双の「屏風」の5つである。それらすべてに、同じ絵とテキストが描かれている。形態(巻物、屏風、屏風を組みあわせた「アコーディオン」のような作品)そのものが「日本風」(japonnaiserie)である。大学附属図書館の純ヨーロッパ的な建築を「日本的」空間として使用することは(図書館の本棚は、何か伝統的な床の間のようなものになりつつある)、「東洋」と「西洋」の間の偽りの衝突を執拗に表している。

そのうえ、「岸辺の夜」のテキストは、仏典、日本古典文学、そして宮沢賢治の童話からの明白な、あるいは隠喩的な引用に富んでいる。にもかかわらず、そこには福音書やアレクサンドル・プーシキン、エミリー・ディキン

ソン、そしてさらにケルト神話やロックンロールの歌の断片を含む、たくさんものを見つけることができるのだ。

確かに、この作品は図書館のために制作されたのだが、これは奇妙でさえある。なぜそこにはボルヘスやエーコについて何もないのだろうか？なぜなら、それはあまりにも度が過ぎたであろうからである。過度に文学的であるにもかかわらず、「岸辺の夜」は、言葉についてではなく、人生の岸辺に座りながら何かをみる可能性や不可能性についての作品であるからである。

32mの巻物のうち、実際に広げられるのは、3分の1だけである。10mはしっかり広げられるが、それをじっと見るためには、ひざまずいたり、しゃがんだりしなければならなくなるだろう。そしてこれはあまり心地よくない。私たちは寺院にいるわけではないのだろうか？「アコーディオン」は足元に置いてあり、それをじっと見つめることは難しい。そして「屏風」は「床の間」にばらばらの順番で配置されており、もう何の話なのかわからない。

見よ、星が流れ落ちた、願い事をしなさい！ おお、ほらそこ、「よだかの星」が空高く高く燃えている！ 波が静かにささやいている、私たちは夜の岸辺に座っている。

(ロシア語からの翻訳：文学部史学科4年 増田優利)

## 資料② 展覧会、レクチャー写真



展示風景



アレクセイエフ氏によるレクチャー



〈岸辺の夜〉展 オープニング風景



会場で、来訪者に展覧会を解説する文学部学生

## 注

- 1 ニキータ・アレクセーエフの略歴、日本文化受容については以下の文献を参照。鴻野わか葉「ニキータ・アレクセーエフ「日本についての書簡」」『翻訳・翻案・伝承——文化接触と交流の総合研究(2)』人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書、石井正人編(千葉大学大学院人文社会科学研究所、2017年) 30-37頁。